
限界生徒会のその日摘み

草木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限界生徒会のその日摘み

【Nコード】

N0490X

【作者名】

草木

【あらすじ】

全員三年生の生徒会役員がうだうだする話です（不定期更新）

リリパットキリング1

四月某日の放課後、生徒会室の円卓に座ってアンバサをちびちび飲んでいると、生徒会長の州洲橋鶯^{すずはしうぐいす}が突然口を開いた。

「鶯堂くん」

「ん？」

「この前貸した三千円返して」

鶯がじつと僕の方を見つめる。

手にした海外小説の頁に指を挟みながら、もう片方の手のひらを差し出して催促する。

「何故急に？」

「鶯堂くんはせびらないと返してくれないから。鶯堂くん、基本お金返さない人だし」

「……失礼なヤツだな」

「三千円、どうしても必要なの」

「明日返すよ」

「だめ。今返して。すぐ返して」

鶯がじつと僕の瞳を見つめる。

ぱつつんと切り揃えた前髪の間から、切れ長の瞳が覗く。

涼しげなまなざし。だが、今は確乎たる取り立ての意志をそこから感じる。

「返さないと鶯堂くんが童貞なのバラす」

「なんで童貞だって分かる？」

「単なる当て推量。でもなんとなく分かる」

「待て。彼女なら居るぞ」

「居るけど童貞なんですよ？」

鶯が図星を突いてくる。

妙なとこで鋭い。この天性の鋭さを駆使して、二年ものあいだ生

徒会長の座に君臨し続けている女だから、当然ではあるのだが。

「もしかして未廣から聞いたの？」

「だから当て推量。でも、これで確証を得たわ。ほら、早く返して」「ぐっ」とおれはおし詰まる。

「さもないと放送部と結託して、鵜堂くんが童貞なのを全館放送するから。序文付きで」

鶯は静かに脅してくる。

全館放送などされた日には、おれのそこそこ充実した高校生活は一瞬で終わる。そもそも序文ってなんだ序文って。

「ほらよ」

ため息を吐いて札入れを開いた。

今月苦しいから、出来るなら来月まで催促を待ってもらい、あわよくばそのままうやむやにして踏み倒す予定だったのだが。

「鵜堂くんはイイ人だけど、お金に関しては最悪の人間だってみんな言ってる。私もその点に関しては激しく同意ね」

「それ、イイ人なのか？」

自分事ながら突っ込みたくなる。

「んー。どうかしらね」

「あのな、おれは別に金を返さないわけじゃない。返す気持ちなら有り余るほどある」

「なら返しなさい」

「だが、あいにく手持ちがない。だから先延ばしになる。先延ばしになると皆が不安がある。そうして口ぐちに『あいつは金を返さない』などと悪口を流布ってくる。それによっておれは恒常的な金欠を強いられ、ますます返すあてがなくなる。その悪循環だ」

「ただの詭弁ね」

鶯は冷淡に鼻を鳴らした。手にした野口三枚を数え、四つ折にしてがまぐちに入れた。

「ところで何に使ったその野口は？」

「渋谷のHIVでCD買うの」

「微妙に違ってるぞ」

「英語の略称は難しいわね」

なんでも今日は《肉骨粉》なるインディー系のホーミーユニットの新譜『恥骨粉碎』の発売日なんだそうである。

「ボーカルのシシウトリアン東郷の甘美な喉歌がたまらないのよね。鵜堂も聴いたら絶対ファンになると思う」

「おれにはよく理解できない世界だ」

「今度放送部と結託してお昼休みに曲流してもらうつ予定だから、聴き逃さないで」

「おまえ放送部と結託しすぎだろ……」

「単なる職権濫用よ」

「単ならねえよ。それ大問題だよ」

野口三体をひらひらとしながら、鶯は艶やかな前髪をさらつと撫でる。

腰までの黒髪、切れ長の瞳、やや薄い唇。

州洲橋鶯は、いわゆる女子高生的なカワイイかんじではなく、きつめの美人である。

歴史上の人物に例えるなら巴御前。あるいはぐつと時代は下るが、十代の頃の栗山千明によく似ていると評される。

「ところで鵜堂くん、汚渌先生から頼まれた仕事覚えてる？」

「仕事？」

「ほら、中庭の蟻退治よ」

「あー先週の定例会議で言ってたあれか」

生物の汚渌敬三先生おぶくけいぞうは、おれたち鴻之台高校生徒会の顧問だ。四十過ぎの地味なおっさんだが、意外と女子生徒からモテる。裏で結構つまんでいるとの黒い噂もある食えないオヤジだ。

それはともかく、その汚渌先生から先週、雑用を頼まれた。

旧校舎の中庭に蟻が大量発生して困っているらしい。それを生徒会でなんとかしてくれ、と言われた。

本来なら用務員の仕事なのだが、今は学校のあちこちで大蠍やヤ

ドクガエル、ヒバゴンやらの出沒が相次ぎ、用務員さんたちはそれらの対処でてんてこ舞いだった。

そんなわけで、比較的危険度と優先順位の低い蟻退治は、生徒会に丸投げされてしまった。

「旧校舎の中庭は、われら生徒会が管轄するのが鴻之台高校創立以来の習わしなの。その習わしを守るためにも、われわれで対処しなくてはならないわ」

「面倒くせえ。刳実や雉男は？」

「残念だけど、生徒会の他のメンバーは今日は欠席なの。私と鵜堂くんで解決するしかなさそうね」

「あいつら何で生徒会来ないんだ？」

「鳳さんは父親の系列会社のパーティーで、栃木くんは埋蔵金発掘部の遠征で赤城山へ行つたみたい」

「刳実はともかく、雉男のは何だ？」

「知らないの？ 彼、部活を八つほど掛け持ちしてるらしいのよ。今どき感心よね」

「そんなの許されるのか？」

「あら、健全な精神と肉体を育むための活動はむしろ奨励されているわ。栃木くんのタフさは賞賛されこそすれ、決して非難されるべきではないわね」

鶯がもつともらしく言う。

中学の頃から生徒会活動に携わっているだけあって、鶯は口が達者だ。おれの前では際限なく無愛想で冷淡だが、人前に出ると普通にはきはきした口調になる。嫌味かよ。

「とにかく、早く蟻を退治しないと私が汚渚先生に叱られちゃうの。鵜堂くん、お手伝いよろしくね」

「しゃあねえな」

おれは頭を掻いて肯く。

生徒会役員なのだから、校内の問題を解決するのは当然だ。どのみち蟻退治なんて、巣穴に水流し込んで即終了だ。

×

生徒会本部のある旧校舎は、じめじめした沼のほとりにある。建物周辺は凶悪な硫黄臭がするため、立ち寄る生徒は少ない。

あの人気のない場所ならどこにでも出没するリア充目バカップル科のつがいですら、ここにはほとんど出沒しないのだ。ある意味では有難い。

鴻之沼と呼ばれるその沼は、もともとは生物部所有のビオトープ（出来た当時はそんな洒落た名称ではなかったが）だった。

鮒や金魚などの水棲生物の飼育がされていたが、その生物部も今世紀初頭に教頭宛の炭疽菌テロが露見して廃部された。

それから十数年、でろでろの超アオミドロ状態のまま鴻之沼は放置されている。

その障気渦巻く沼地のほとりに広がる草ボーボーのステップ地帯が、われら生徒会保有の中庭である。

「相変わらず陰気な場所だな」

回廊の窓から中庭を見つめる。

「静かで良い場所よ。私は暇なときは、よくここに来て本読んでるわ。ラヴクラフトとかマッケンとか、その手の古式ゆかしい怪奇小説が合うのよね」

「……沼からぼこぼこ泡立ってるぞ？」

「ふふん、それが侘び寂びよ」

「芭蕉が聞いたら怒るぞ」

長年、放置されっぱなしの沼からは、明らかにメタンと思われる臭気のあるガスが絶え間なく噴出している。

このガスの出所は、川崎大空襲のときに焼け出された鴻之台高校（当時は旧制中学だが）の生徒の溺死体である。焼夷弾に焼け出された生徒が次つぎと沼に飛びこんで、そのまま溺死し、死体が沈黙して腐敗してガスが発生しているのだ。

死後も引き上げられることなく、アオミドロの中で腐敗する生徒の怨念が、ああして不気味な泡となって噴くそうである。

「なにその噂。それ絶対うそよ。だってここ、八十年代以降に造られた人工沼だもの。第一、ガスが噴くほど死体が堆積してるなら、とつくにサルベージされて慰霊碑が建立されてるわ。くだらない」

「知ってるよ。ただ、学校の大半の連中はそう信じてるらしい。オカルト研のやつらがその手の噂を広めてるんだ」

「オカルト研……近代合理主義を否定し、迷妄や流言飛語を広める悪しきカルト集団ね。いずれ生徒会の正義の名のもとに鉄槌を下してやるわ」

「どこぞの独裁者かよ……」

くくく、と邪悪な微笑を浮かべる鷺。

なまじ美少女なので、邪悪な顔をするそれが際立つ。デスノートを拾ったら確実に大量虐殺という名の選民を行うタイプだ。

「でも、この沼の周辺で戦中防災訓練が行われたのは確かなのよね。B29を竹槍で落とす練習をしたって校史で読んだわ。噂の出所はそこかしらね」

「へえ、詳しいな」

「というか、わざわざ広辞苑級に分厚い学校史を読み通すとは物好きめ。」

「まあ、防災訓練といっても、ちゃんとした訓練は前半のみで、後半は竹槍にご飯を詰めて竹ごはんにしたらしいわね」

「割ったら槍として使えねえじゃん」

「そうよね。地元婦人会の有志が炊き出しをしてくれて、訓練を終えて腹ぺこの生徒たちは炊きたての雑穀を喜んで食べたとか」

「なにその微笑ましいエピソード」

そんな極めてどうでもいい雑談をしながら、おれたちは校舎裏の戸口から中庭に出て行こうとした。

「ちよつち待ったあ！」

間抜けな掛け声と共に、ミジンコ柄のシュシュをした冴えない女

子が廊下の角から飛びだしてきた。

「あら鳶坂さん、居たの？」

「うぐつち、ひどい……」

未廣は半泣き顔で鶯をぺしぺしやる。

「やめて。手の脂で制服が汚れるわ」

「そんな汚くないし！」

「貴女と私とでは衛生観念のレベルが違うの。今度気安く触ったら二酸化塩素ぶっかけるから覚悟しなさい」

鶯がしかめっ面でえんがちょを切る。

とひさかみひろ

鳶坂未廣。

鴻之台高校三年。生徒会副会長にして、おれの幼馴染みの少女だ。そこそこの器量と地味めの性格から「バニラ」「モブ子」「ダメなギャルゲーのメインヒロイン顔」などという不名誉なあだ名をつけられがちな女子である。

「なんだ、未廣が残ってるじゃんか」

「どうやらそのようね」

「うぐつち、どうして毎回毎回、わたしをハブるの？ 陰湿なイジメなの？」

未廣が涙目で鶯に迫る。

鶯は不快感に目を細めると、

「貴女、存在感薄すぎてよく忘れるのよね。居ても居なくても大勢に影響がないし、むしろ居るとその分、大気汚染や室温の上昇などの弊害があるし」

「わ、わたしだって生徒会の一員だよ。てか、むしろ副会長だよ？ 本来ならうぐつちの片腕として手腕を発揮する立場だよ？」

「私は正直、貴女を副会長として認めたおぼえはないわ。鳳さんや鵜堂くんの方が役員として優秀なもの」

冷淡にあしらわれ、未廣はぐうの音も出ない様子で恨めしく睨みつける。

おれだったら、これだけ嫌味を並べられたら激怒する。

が、根がきまじめで小心者の未廣は「えへへ」とロシア文学に登場する木っ端役人のごとく卑屈な笑みを浮かべると、

「こ、今後は努力するから……」

と小声で言い訳をした。

さすがに気の毒なので、おれは横からフォローを入れる。

「まあ、せつかくだし、未廣にも手伝ってもらえよ。てか、役員なんだから手伝え」

「……そうね。力仕事なら、鳶坂さんでも出番はあるでしょうね」
なかなか棘のある言い回しだが、単純な未廣はその皮肉に気づく様子もなく、につこりとしておれの手を取る。

「うん。まあくんよろしくね！」

「暑苦しい。ひつつくな」

「えへへ。めんご」

背筋の凍る死語で詫びる未廣。

驚のこめかみにぴきぴきと青筋が走る。

この二人、一年の頃から仲が悪かったが（というか驚が一方的に未廣を敵視しているのだが）ここ最近はそれが険悪化した。ずばらな未廣と神経質な驚、社交的な未廣と孤高の驚は、性格から何から対照的すぎて水と油だった。

「おまえ、何の仕事するか知ってるか？」

「うん、汚渕先生から聞いた」

「害虫駆除だぞ？」

「大得意でござる。幼稚園の頃、よくまあくんと一緒にありんこ殺したよね」

「あの頃、おまえ蟻食ってたもん……」

「酸っぱいから好き」

今でも大概阿呆だが、幼稚園児の頃の未廣はガチで阿呆だったため、おれが食えと言うと鼻水を垂らしながら何でも食した。

「蟻なんか食べてたの？ 引くわね」

「蟻食は別に珍しくはないだろ。ミツアリなんかはよくアボリジニ

が食ってるしな」

おれが未廣を庇うと、鶯は一瞬言葉に詰まる。鶯にしてはくだらないケチをつけるもんだなあ、と思ってまじまじ見ていると、頬を赤くして「それもそうね」と答えた。

「どうした鶯？」

「二人とも油売ってないで行くわよ！　こんなところで時間を無駄にしたくないの」

何故か怒りだすと、鶯はさっさと勝手口のドアを開き中庭の草むらへ踏み込んで行く。

「うぐつち、何でイライラしてるんだろ？」

「さあな」

おれは肩をすくめる。

「もしかしてあの日なのかなあ？」

「おまえはおまえで、年頃なんだからもう少しデリカシーをだな」

「…」

「あ、ほらうぐつちが呼んでる。行かないとスコップで脳天叩かれるよ！」

あの不機嫌ぶりだと、本気でスコップを振りまわしかねないので、おれたちは大わらわで鶯のもとへ急行した。

×

蟻の巣は地中深くに張り巡らされていて、女王蟻の潜む最深部は結構な深さにある。

雨が降ると、入り口をさっさと固めて中まで水が入るのを防ぐそうである。なので、ホースで水を濯ぎ込んだ程度では、蟻を全滅させるのは難しいのだと知った。

「その程度で蟻を殺せると思ったの？　忌憚のない意見を言わせて

もらつと、貴方、蟻を舐めてるわね」

「蟻を舐めるのは未廣の方だが」

「ふざけないで。蟻は怖ろしい昆虫なの。侮るとひどい目に遭わされるんだから」

鶯が険しい双眸で中庭の草むらを見つめる。

たしかに、蟻はその小柄な体軀から、他の害虫に比べて侮られがちではある。最終鬼畜害虫Gに比べると、ずっとインパクトの点で見劣りする。

「でもゴキブリは外見こそ不快だけど、実害はたいしたことはないの。その点、シロアリなんかは家を倒壊させる危険があるんだもの。害虫の中でも四天王クラス、さながらサガット並みの実力の持ち主よ」

「例えが微妙すぎるぞそれ」

「だから殺虫剤用意してきたわ」

そう言つて鶯が持ち出したのは、蟻専用の殺虫乳剤だ。先端が細いノズルになっていて、蟻の巣穴の奥の奥まで毒素が届く。所謂蟻版バンカーバスターである。

「これで地中に潜む蟻を一網打尽にするの」

「化学兵器か」

おれは鶯から薬剤のポリタンクと撒布用ノズルを受け取ると、蟻の巣穴を探しに草の中へと分け入る。

汚渾先生によると、ここ最近、旧校舎の家庭科室に蟻が侵入し、保存してあつた砂糖や小麦粉を食べられる被害が続発しているそうである。

「シロアリじゃないの？」

「普通の黒蟻だろ。シロアリ被害だったら、正直おれたちの手には負えない。学校側だつて専門業者を頼むだろうさ」

「黒ならくしょーだね」

わたし見つけてくる、と未廣が鶯に良いところをみせようとして率先して草むらへ飛び込んだ。小学校低学年並みのフットワークの

軽さだ。

「素足で草むら入ると刺されるぞ」

「へーきへっちゃらだよ」

袖を捲って草の中へ手を入れる。

中庭は長年手入れがされてないので、腰の辺りまで背高泡立草やらオオイヌフグリなどの雑草が生い茂っている。小柄な未廣が屈むと草の中に埋没して姿が見えなくなる。

「……妙ね」

鶯が眉をしかめる。

「何がだ？」

「蟻が一匹も居ないの」

「そう言われればそうだな」

中庭の見える範囲には、蟻の姿が見当たらなかった。夜間ならまだしも、日中この時間に見つからないのは奇妙だ。

汚渌先生が言うほど蟻の被害が大きいのなら、中庭のあちこちに蟻が行列をつくつていてもおかしくはない。

なのに辺りはしんとして静かだ。

「蟻どころか他の昆虫も居ないな。先に誰かが殺虫剤を散布しちまつたのか？」

「まさか。そんなはずは……」

困惑して言い淀む鶯。

と、その瞳が驚愕に見開く。

「う、鵜堂くん？」

「なんだ」

「あそこ、なにあれ？」

鶯がこわごわと指を指した。

草むらの奥からこちらに向かって、黒い絨毯のようなものが形成されている。絨毯はざわざわと動きながら、緩慢な速度でこちらへ近づいてくる。

「な、なんだあの数？」

「見た感じ十数万匹は居そうね」

コミケ会場並みの密度でもって、蟻が押し合いへし合いわらわらと迫ってくる。悪霊に憑かれた豚の大群のような怒濤の勢いだ。

「未廣！ 逃げろ！」

蟻の巣探しに夢中な未廣は、迫り来る蟻の大群に気づかない。咲き乱れるヒメジオオンを手にとって「あ、ハルジオン咲いてる。きれー」などとほっこりしている。

「バカ！ 早くこっち来い！」

「ふえ？」

立ちあがった未廣が振り向こうとした瞬間、大量の黒蟻の群れが未廣へ襲いかかる。

数百匹もの蟻は上履きをよじ登って、未廣のふくらはぎをもぞもぞとよじ登る。

「嫌ああああああッ！」

絶叫して振り払おうとした瞬間、踏みつぶした蟻の体液に足をすくわれたのか、すてんと転倒した。

「ぎゃあッ！ 服ん中入ってこないで！」

未廣が必死に服から蟻をつまみ出そうとした。その時点で多少の蟻など無視してさっさと逃げるべきだったのだ。

一瞬の判断ミスが命取りだった。

「ひぎいっ！ 股んとこ齧られてる！」

倒れた未廣めがけて、何千何万もの蟻が襲いかかる。黒くわらわらした蟻の絨毯が未廣に覆いかぶさって、蟻の海に呑み込まれてゆく。

「ひぬあーっ！ ひやめえええっ！」

頭のでっぺんからつま先までを満遍なく蟻に咬まれ、未廣が凄まじい悲鳴を發してのたうちまわる。

阿鼻叫喚の地獄絵図だ。

半開きの未廣の口や鼻の穴へ、次つぎと蟻の大群が這入ってゆく。下手すると蟻の死骸で窒息しかねない。

「未廣！」

「まあくん…助けて…たす…け…」

人のかたちをした蟻の塊の中から、未廣の微かな声が聞こえる。

「待ってる！ 今行く！」

おれは蟻人間と化した未廣のもとへ飛び込むと、未廣を抱きしめたまま草の上を転げまわる。

「目、目がまわ」

「我慢しろ！」

ちくちく、と手足を咬まれたが、構わず二人で大回転をしながらごろごろと驚の方へ逃げ戻る。

兇暴な蟻とて、さすがに体重をかけて潰すと、次つぎとすり潰されてその数を減らしてゆく。七、八回ほど回転するうち、大半の蟻が死んだので、おれはぐったりした未廣を背負ってその場から退散した。

「驚！ 薬剤を散布しろッ！」

「承知」

後陣に構えた驚は酷薄な薄笑いをたたえながら、手にした殺虫剤を容赦なくバラ撒く。

乳液を浴びた蟻たちは弱って動きが鈍くなる。殺虫剤を浴びた蟻同士がぶつかることで、その効果が全体へと波及し、みるみる進軍速度が落ちた。

その隙に、おれたちは勝手口まで退却し、ドアを閉じて蟻の侵入を防いだ。

「間一髪か」

「危うく三人揃って蟻の餌にされるところだったわね。鳶坂さんなんか、鵜堂くんが救出しなかったら確実に蟻の死骸みたく巣穴へテイクアウトされてたわ」

「未廣は死んだ蝉と同等かよ……」

死んだ蝉が蟻によって運ばれて行くのは晩夏の風物詩だが、さすがに幼馴染みがそんな末路をたどるのは可哀想だ。

「だいたい中庭の蟻、獰猛すぎだろ。あんなものの駆除を生徒会にやらせんよ。下手すると死者が出るぞ」

「だから蟻は危険なのよ。次からは肝に銘じておくことね、鵜堂くん」

「おまえもな」

「分かつてるわよ」

鶯が嘆息して肩を落とした。

偉そうな口調でも、内心は生徒会役員から負傷者を出してしまつたことに対して後ろめたく思っているのだ。

独裁的で独善的な鶯だが、意外と責任感の面では生徒会長らしいところがある。

「鳶坂さんを保健室へ運んで手当てしなくてはね」

鶯は未廣の蟻の死骸まみれの顔を濡らしたハンカチで拭いてやる。大型の黒蟻に咬まれたので、ところどころ皮膚が破れて血が滲んでいる。痛ましくて目をそらしたくなる。

「未廣はおれが背負つて行く」

「まあくん、わたしなら大丈夫」

「大丈夫じゃないだろ。ほら、おぶつてやるからじつとしてろ」

血まみれで恥ずかしがる未廣を説き伏せると、おれは彼女を背負つて保健室へと搬送した。

リリパットキリング2

全身数十箇所を蟻に咬まれた未廣は、その夜、発熱してしまった。
三十九度近い熱を出し、翌日は学校を欠席した。

「蟻に咬まれたせいかしらね」

「だろうな」

おれはロイヤルアイステイーを飲みながら、鶯をそれとなく見る。

「……そんな目で見ないで頂戴。責任は感じてる」

「別に怨んでねえよ。まさか蟻に咬まれて熱を出すなんて予想外だしな」

翌日、おれと鶯は学食でランチを食べながら次の一手を探ることにした。

最初は一人で食べる予定だったのだが、鶯がランチをおごってくれるというので、一も二もなく飛びついた。なんでも、肉骨粉のCD発売が遅れたそうである。

「あの蟻、相当あこの力が発達してるわね」

「鍛え方が違うよな」

「それに動きが普通の黒蟻と段違いね。統率力があるのよ。あの組織力でもって、中庭の邪魔な昆虫を一掃したんでしょうね」

「小さくてもたいしたもんだ」

山椒は小粒でもぴりりと辛いとはよく言ったもので、世の中、小さなものが大きなものを首尾よく征することがときどきある。

巨漢ゴリアテを石礫で倒したダビデ、弁慶の泣き所を打ちのめした牛若、鬼のはらわたを突く一寸法師など、たとえ小柄だろうと飛び道具や急所狙いなどを駆使して大物を仕留めることが出来る。

「驕れるものは久しからず。いくら蟻でも、あの攻撃力の蟻となると、生身でかかるのは危険ね。返り討ちにされちゃう」

「スズメバチ級の危険度だしな」

「残念だけど、この殺虫剤は使い物にならないわね。あの状況で巣に近づくのは自殺行為だもの」

「せっかく用意した殺虫剤も、巣の付近まで隣接できないと効果が拳がらない。」

地上部隊を殺したところで微々たるものだし、迂闊に刺激すると圧倒的戦力でもってこちらが包囲殲滅される危険がある。

「こちらから攻撃を仕掛けるのではなく、待ちに徹するべきね。蟻にたかられるのは絶対イヤだし」

全身蟻女と化した末廣の惨状を思いだしたのか、鶯が怖気をふるった。正直、おれもあの二の舞を演じるのは勘弁だ。

「だが、待ってたって蟻は死なんぞ？」

「手はあるわ。遠くからでも、巣の中の女王蟻を確実に殺せる手段がね」

鶯がA定食の和風ハンバーグをお箸で一口サイズに切り分けながら断言した。

「どんな方法だよ？」

「あとで説明してあげる。それはともかく、ちよつとソース取ってきてくれる？」

「なんでおれが」

「てか、和風ハンバーグだぞそれ？ 大根おろしにソースかけんのかおまえは。」

「お昼おごつてあげたんだから、調味料くらい持つてきなさい。気が利かないわね。これだからベリーは」

「うっせえ、童貞バカにすんな」

「それはチエリーでしょ」

「じゃあ何だよベリーって」

メシをおごつてもらった弱みで反論できず、おれは肩をすくめて調味料棚からソースを取ってくる。

「が、おれが中濃ソースを持って行くと「私ウスター派なの。それ

くらい察して」とにべもなくつつばねられ、もう一度取りに行かされた。おれはエスパーじゃねえっての。

×

旧校舎三階の奥まった一室に入ると、コーヒークップを手にした白衣姿の女子がふらっとあらわれた。民族衣裳らしき青金石の力チューシャをして、灰色がかった瞳でおれたちを見つめる。

その顔は能面のように無表情で、まるで捉えどころがなかった。

「驚。どうしたの」

「くろろ。依頼があるの」

「面倒な依頼？」

「ええ、とびっきりのね」

驚が請け合つと、淪は無表情のまま「とりあえず入ってくれる？」とおれたちを室内へ案内してくれた。

黒瀨淪は、SSLなる部活の部長をしている。正式名称は莓シロップ研究所と言うらしく、前身は夏季限定のかき氷同好会だったそうである。

廃部寸前のSSLを淪が乗っ取って、情報部へと変更した。表向きはかき氷同好会の看板のまま、実際は驚の犬となって校内で各種スパイ工作活動を行っているそうである。

「で、依頼ってのは？」

「ペレット型の蟻の殺虫剤を作って欲しいの。なるべくなら二、三日で」

「早急ね。蟻の被害が出てるの？」

「ええ。すでに生徒会からひとり犠牲者が出たわ」

「……マジ？」

コーヒーを飲む淪の表情が変わる。

まさか世の中に蟻に襲われて怪我をするやつが居るとは思ってもしなかったらしい。おれだって実際に目撃しなかったら、一笑に附

して信じなかったと思う。

「本当だ。未廣がやられた」

おれが代わりに答えた。

「怪我、ひどいの？」

「集中治療室に入ってるわ」

「うそ？ 蟻に襲われた程度で？」

淪が目を剥く。

「それは嘘だけど、蟻に襲われて怪我をしたのは本当よ。このままだとほかの生徒にも被害が出るわ」

「そんな非常事態なら、われわれSSLも手を貸さないわけにはいかないね」

「話が早くて助かるわ」

「困ったときはお互いさまだから」

淪と驚が意味深な目配せをする。

この二人は中学時代からの親友で、昔から持ちつ持たれつやってきたそうである。SSL自体も生徒会の出先機関のようなもので、活動資金の不正請求や、生徒会選挙の票操作などの黒い噂が絶えなかった。

「マツコイ、起きて仕事」

「なんすか大将」

淪に呼ばれて、金髪のくせつ毛の少年がソファの下から這いだしてくる。アイマスクをはずすと、ファッション誌の外人モデルのような端正な顔立ちの美少年だった。

「その子、誰なの？」

「ああ、紹介するわね。彼はジョン・マツコイ。中等部二年で、父親の仕事の都合で四月から交換留学してんの。で、うちの部で身柄を預かってるかんじ」

「ジョン・マツコイです。生まれはメイン州のデリーっす。ガキの頃はよくグリズリー撃って焼いて食ってました」

なかなかワイルドな美少年である。

「日本語が堪能な子ね」

「母が横須賀のパブ出身なもので、日本語はふつーに得意っす。向こうではポケモンカードとかやってました」

「語尾にすをつけるのは何故？」

「単なるくせっす」

「彼、こう見えて科学＆化学分野に精通してるの。ねえマッコイ。蟻にきく毒入りの置き餌って作れる？」

淪が問うと、マッコイは造作もなく、

「ああ、そんなのは朝飯前っす。録り溜めしてある深夜アニメ消化しながらだって作れます。実際、そろそろ崩さないとHDDがぱんぱんなんすよね」

「そんな簡単に毒餌って作れるのか」

アニメ見ながら片手間でつくった毒餌に殺される蟻は気の毒だが、幼馴染みの仇なのだから同情はするまい。

「なるべく強力なやつを頼んだわよ。一族郎党揃ってコロリと死ぬやつをね。われわれ生徒会の威信が懸かってるんだから」

「あい」

マッコイは大あくびをしながらうなづく。

ソファの下で眠っているとところを起こされ、腫れぼったい目をこしこし擦る。

「すみません。昨日は遅くまでアニメ見ながら実況してたもので、寝不足気味で」

「まあ、期日までに仕上げてくれるんなら問題ないわ。よろしくお願いね、マルフォイ」

「マッコイっす」

マッコイ少年は憤然として訂正した。

×

翌日の昼休み、おれと鶯が生徒会室で抹茶味のマカロンを食べて

いると、マツコイ少年が友禅の風呂敷を携えてあらわれた。

「ちわつす。毒餌完成しました」

「その風呂敷、鳳さんのじゃないのか？」

「そうです。この布、日本の伝統的な包装材らしいっすね。うちの部長が借りてたんで、ついでに返しに来ました」

マツコイが一つ結びにした風呂敷をほどくと、中からプラスチックのケースと、白い顆粒状の毒餌入りの袋が出てくる。

んな物騒なもん風呂敷に包むなよ……

「市販の『蟻の巣バスター』を改良して、蟻の誘引フェロモンを餌の中に配合しました。蟻の致死率を高めるため、高濃度アントキシンを混入してます。これならどんな蟻だろうとイチコロっす」

「よくやったわ。お手柄よ」

鶯が満足げに目を細める。

「さあ鵜堂くん。設置をしてきて頂戴」

「結局危ない橋を渡るのはおれか」

「つべこべ言わないで」

というわけで、実際に毒餌を設置して、数日経過を観察することにした。おれとマツコイの二人で、何度か蟻の大群に襲われて命から中庭の数力所に置き餌を設置した。

このマツコイ少年、重度のアニオタのわりに腕前はたしからしく、毒餌を撒いてから向こう、みるみる中庭の蟻の数が減少した。

強烈な誘引フェロモン（その効果は腹ぺこのときに嗅ぐ焼き肉のタレのにおいに匹敵するそうである）に悩殺された蟻は、畏とも知らず毒餌に近づき、せっせとそれを巣に持ち帰る。

食事後に待ち受ける空前絶後のカタストロフィーなど、彼らは知るよしもない。

その効果たるや絶大で、未廣をキズモノにしたにつくき蟻どもが、二、三日のあいだに三分の一程度にまで減少した。

「なかなか順調のようね」

「この調子なら、今週中には一掃できる」

「そう」

鶯がベノアの紅茶を飲みながら優雅な仕種でブラインドを指で押し広げ、隙間から中庭を見おろした。

遠目からでは何の変化もみられないが、中庭の蟻は確実にその数を減らしている。すべて死滅するのも、もはや時間の問題だ。

「それで鳶坂さんの容体は？」

「ああ、ぴんぴんしてる。頑丈なのが唯一の取り柄だからな、あいっは」

熱を出して二日ほど病欠したものの、三日目にはけろりとした顔で登校した。

なんでも『蟻に咬まれてから視力が良くなった』らしく、それまでコンタクト（授業中は眼鏡）をしていたのだが、裸眼でOKになったそうである。

「……どっかの蜘蛛男みたいね」

「そのうち蟻酸とか吐くかもなあ」

そんな冗談を言い合いながら、紅茶とマカロンで優雅な午後の一時をすごした。

蟻問題に解決の糸口が見えてきて、ここ最近鶯の機嫌が良い。八つ当たりされる回数が減っておれとしても有難い。

×

ところが、一週間をすぎた辺りから雲行きが怪しくなった。

中庭の黒蟻は、ある一定量まではその数を減らしたのだが、どうしても全滅させるまでには至らなかった。

主力を失い、烏合の衆と化したためか、いぜんに比べると攻撃性は格段に落ちたものの、蟻の撲滅が課題なので、ここで攻撃の手をゆるめるわけにはいかない。

「鵜堂くん、どうなってるの？」

鷺が眉間に皺を刻みながら、イライラとシャープペンを秒間十六連打でノックする。どうやら汚渕先生から何か言われたらしく、朝からえらく不機嫌だ。

「どうやら、三つある巣穴のうちの二つまでは破壊できたんだが、最後の巣穴の抵抗が強くてな」

「マツコイの毒餌は？」

おれは首を横に振る。

その巣穴に関しては、毒餌はまるで通じなかった。毒だと気づいて食べるのをやめたのか、それとも耐性があるのか。

「直接、巣穴を破壊すべきね。三分の一程度の残存戦力なら、あとは直接攻撃でなんとか対処できるはずよ」

「そうだな」

「決戦は明日の放課後ね」

おれはうなずき、英語の教科書を開く。本文の訳を宿題として出されたので、生徒会業務の傍ら片づける。

×

次の日、散りかけの桜を眺めながら登校していると、目の前からポロポロのタイツを着た少女が駆けてくる。

他人だったら良いんだが、と一瞬思ったけど当然そんなはずはなく、おれの幼馴染みの女だった。

「まあくんおっはよー」

「なんだよ未廣。その破廉恥な恰好は」

ついさっき公園の茂みに連れこまれて暴漢に襲われました、みたいな恰好で出て来られると困惑する。

長年付き合いのあるおれですらそうなのだから、知らない人が見たら、明らかに誤解される恰好だ。

「今日、また中庭行くんでしょ？ だから齧られても大丈夫なよう、

わざとダメージタイツ穿いてきたの」

ダメージタイツと言うとそれっぽいけど、要は先日蟻に咬まれたときのタイツである。ただの使いまわしだ。

未廣のタイツはあちこちほつれ、黒い編み目と生肌が扇情的な効果を醸している。楚々としたブレザーにエロティックな破れタイツは一発退場級の反則だ。

「脱がないと生活指導に捕まるぞ」

「そうなの？」

これはこれで嫌いではないが、生徒会役員が昼間っからこんな恰好をしていたら、鬼の風紀委員が光の速さで駆けつけてくる。

「このタイツどうしょ？」

「捨てる必要はない。うちに遊びに来るときに穿くって手もある」

「まあくんちで？　なんで？」

未廣はきょとんとしたが、ははあと合点し（この中途半端に鈍く、中途半端に聡いのが未廣たるゆえんだが）よれよれのタイツをつまんで、

「まあくん、こーゆン好きなの？」

「ち、違う！　おれはただ」

「えへへ。うんうん、男の子だよねえ」

「なんだよそれ」

未廣はてれてれすると、じゃあ、これとつとく、と言って畳んでブレザーのポケットへ収めた。

×

放課後、目を赤く腫らしたマッケンがファミマのレジ袋に新作武器を入れて持って来てくれた。

「ふああ」

「貴方はいつも眠そうね」

「大将に言われて殺虫スプレー改造してきたっす。単に霧を撒布するんだと威力不足なんで、ガス圧で薬剤入りのジェル弾を発射し、蟻を毒液そのもので絡め取る風にしました」

鶯が持参した殺虫剤の散布ノズルに、ごついシリンダーやらトリガーやら光学照準器やらが取り付けてある。

「飛び出すジェル弾が雀みたいなんで、スパローショットと命名したっす」

「へえ、良い感じね」

「明らかにオーバーキルな感じがするが」

ライフル風に改造された殺虫スプレーを肩にかけると、鶯は意気揚々と中庭へと進撃した。

鶯が巣に近づいてくるのを、見張り役の蟻が素早く察知した。何かの合図を巣に送ったらしく、中庭の片隅の樅の木の下から、蟻の大群が間歇泉のごとく噴き出し、わっと押し寄せてくる。

「鶯、やつらの巣はあそこだ」

「そのようね」

鶯はスパローショットを構えると、蟻の集団の先頭めがけて撃ち込んだ。

「薙ぎ払え！」

高速連射されたグレネード型の薬剤が空中で破裂し、とろっとしたピンク色の液剤が大地に雨あられと降り注ぐ。

先陣を切った蟻はそのピンクの雨に絡め取られ、糸のような四肢を震わして絶命した。

「ふん。汚い花火ね」

「ノってんなー……」

「うぐっち、怖い」

さんざん蟻に手を焼かされたうつぶん晴らしなのか、鶯は殺虫剤を容赦なく撒き散らした。たちまち庭中がピンク色のぶよぶよしたゼリーまみれとなる。

……明らか環境に悪そうなんだが。

それでも以前の一大勢力なら、同胞の屍を乗り越えて鶯の足もとまで肉薄できた（体に群がられた時点でこちらが不利だ）だろうが、毒餌で戦力を減らされた蟻勢に勝ち目はなく、じりじりと巣穴周辺へと追い込まれた。

「さあて、年貢の納め時ね」

鶯が巣穴の入り口にノズルを向ける。塹壕に潜む敗残兵を焼き殺す火炎放射器兵のごとき残忍な表情で巣穴に薬剤を流し込もうとした。

が、

「待ってうぐつち。何か変だよ？」

「うん？」

巣穴から、他の蟻の半分ほどの小さな蟻がわらわらと出てくる。

蟻たちはおれたちから一定の距離を取ると、統率された動きでもって一箇所に集合した。

数千匹の蟻がそれぞれ決まった位置に移動することで、文字が浮かび上がる。

「コ、ウ、サン……降参？」

「蟻が人間の言葉知ってるなんて……」

「な、何なのよこの蟻たち？」

さしもの鶯も驚愕を隠せない。

おれたちは驚いて蟻の不可思議な動きを見つめる。甲子園の某学園の人文字並みの見事な動きだ。一介のありんごことき出来る芸当とは思えない。

「一体、なんなんだ？」

おれの問いに、ふたたび蟻たちが文字を作る。一文字作るのに五秒かかるため、それは遅々とした判読だったが、その意味するところをまとめるところだ。

彼らの巣穴の中のある蟻がある日、知性に目覚めた。その蟻は神からの啓示を受け、アントニオなる聖なる名前を授かった。

その蟻は周囲の蟻たちを啓蒙教化した。ただ日々の糧を得るために生きるのではなく、蟻として生きることの意味を探ってゆこうと仲間たちに切々と訴えた。

蟻にしては卓越した知性の持ち主であるアント二才は、たちまち蟻望を集め、巣穴を掌握した。

やがてその初代アント二才は死んだが（蟻の寿命は結構短い）その教えは今もなお巣穴で生きつづけている。

アント二才は神格化され、彼を救世主と崇める女王蟻によって、若き蟻たちの教育が進み、今では人語を理解する優秀な蟻まで現れているそうである。

「なるほど。一匹の卓越した蟻の教えを、社会全体で保持してるのか。社会性昆虫ならではだな」

「蟻さんって凄いね」

未廣が目をまるくする。

この調子でアント二才の子孫たちの文明化が進んで行ったらどうなるだろうか。人類文明について学ぶ彼らは、おそらく日進月歩の速さで進化し続けるはずである。

ゆくゆくは、人類文明と肩を並べる巨大文明が勃興するかもしれない。

「蟻文明か」

「興味深いわね」と驚があごに手を添える。

だからどうか見逃してくれ、と蟻たちは一糸乱れぬ蟻文字で頼んでくる。

「なあ驚。ここは皆殺しにするのはよしておこうか。こいつらが進化するのを見守るのは、きつと面白いぞ」

「そうだよぐうち。可哀想だよ」

おれと未廣が口々に言い立てると、

「そうね。知性を持つ者を徒に殺めるのは、人として恥ずべき行為だわ」

驚はふつと愁眉を開くと、やれやれ、と肩をすくめて優しく微笑

した。

「だが断る」

「えええっ！」

鶯は蟻文字めがけてスパローショットを撃ちこみ、その勢いで巢穴に薬剤を流し込んだ。

さすがは州洲橋鶯。

まさに外道。

「だってここ、生徒会の管轄なもの」

「しかし……」

「だめよ。生徒会として危険な生物を放置しておくことはできない。たとえ可哀想だろうと、里山に降りてきた熊は射殺されるのが運命なの」

「しかし、やつらは知性が……」

「知性云々は関係ないわね。知性があるから殺さないなんて言ったら、捕鯨なんてできないじゃないの。じゃあ仮にゴキブリに知性があつたら、殺さないで保護するの？」

「それは、まあ、殺すけど」

「知性なんかじゃなくて、あくまで人間の損益を第一にして考えるべきよ。そしてこの場合、彼らを生かすのは鴻之台高校全体の利益にならないと判断した」

鶯が淡々とした口調で語る。

文句ある？

そう睨まれると、おれは黙るしかない。

鶯の判断の方が正しい。おれたち生徒会役員だ。学校や生徒の益になる行為を取るべきだった。

それは分かってても、蟻たちの最後の懸命な振る舞いを見てしまうと、気持ちが悪く後ろめたくなった。

「何してるんだ未廣？」

未廣が樅の木の根もとにうずくまる。

「お墓つくってるの」

「お墓？」

「蟻さんたちのお墓」

未廣は知性ある蟻の死骸を集めると、薬剤で満たされた巣穴へと沈めた。その上から砂をかけると、卒塔婆代わりの割り箸を突き刺した。

「くだらない」

侮蔑した様子で吐き捨てる鶯をよそに、おれと未廣は手を合わせて蟻の墓を拝んだ。

×

それから数日後。

おれはいつものように生徒会室に行くと、窓辺に腰をおろして雑誌を読んだ。

五時間目の授業が先生の急用で自習になったので、図書室で勉強すると嘘について教室を抜け出した。

生徒会の窓辺に並べてある、背の低いロッカーの上に腰をおろし、カーテンをハンモックのようにして窓辺に腰を下ろす。

この座り方をするとカーテンレールや金具が痛むからやめて、と未廣や鶯に叱られるのだが、今は生徒会室におれ一人だ。構うものか。

「良い天気だな」

抜けるような紺碧の青空を眺め、おれはうつらうつらする。

読みかけの分厚い図鑑を胸の上に伏せると、おれはうつすらと目を閉じた。

「こんなとこで何をしてるの？」

「鶯か」

「会長と呼びなさい。役員が呼び捨てでは全校生徒に示しがつかない」

いわ」

鶯が冷やかな目で寝そべるおれを睨みつける。小脇にオーラルコミュニケーションの小冊子を抱えているところを見ると、生徒会室に置きっぱなしだった英語の教科書を取りに来たらしい。

「ちようど良かったわ。鵜堂くん。汚渕先生に上げる最終報告をまとめたから読んでくれる？」

そう言くと、鶯は小脇のクリップボードに手挟んだA4の書類を一部寄越した。

今回の蟻騒動に関するまとめが、鶯の手によって簡潔に記してある。

蟻による生徒への加害、毒に耐性を持つ蟻を駆除するための殺虫剤改良などの経緯が淡々と並べある。

「諸経費が三万六千……って、ほとんどマツコイの材料費かよ。高すぎ」

とはいえ、あの状況でまともに突っ込んでいたら、生徒会一同が玉碎していたのは間違いなく、必要な費用ではある。

仕方なく、今月の緑化運動に使う予定の予算をまわして穴埋めした。いくら生徒会として、役員の一存で自由になる予算は微々たるものだから、四万の出費は痛い。

「けどまあ、これで面目は潰れないで済んだわ。あの蟻どもが居なくなっって清々した」

「本当かな？」

「……何が」

「今朝な、中庭の蟻の墓を見に行ったら、花が手向けてあったんだよな」

縦の木の下、未廣が突き刺した割り箸の前に、草花が供えてあるのを発見した。

まだ摘みたてらしく、多少しおれながらも、花卉は白く瑞々しかった。

「鳶坂さんがやったんでしょうね」

「さて、それはどうだろうな？」

「……さっきから何が言いたいの？」

鶯の表情が硬くなる。

「見たところ、献花は全部ハルジオンだった。ヒメジオンとハルジオンの区別がつかない阿呆の未廣に、そんな真似は不可能だ」

おれが図鑑を片手に述べる。

「鶯坂さんが偶然、ハルジオンばかりを集めてしまった可能性は？」

「なくはない。が、極めて低いな。あの庭に咲いているのは、ほとんどヒメジオンだったから」

おれは手にした植物図鑑の頁を開く。

今朝、花が手向けてあるのを見て、なんとなく誰の仕業か察したのだ。

「何故、花を供えた人物がヒメジオンではなくハルジオンを選んだのか、おれは不可解だった。まあ蟻ごときに花を供えるなら野花で十分だったのは理解できる。だが、あえてハルジオンで統一したのは何故か？」

身を乗り出してたたみかける。

「ヒメジオンの花言葉は『素朴で清楚』とある。死者を弔うのに向かない。それに対して、ハルジオンの花言葉は……」

「『追想の愛』」

鶯が先まわりして可愛らしく口にした。

「残念だけど、ちょっと見当違いね。私は蟻に対して愛情なんて抱いてないもの。考えとしては面白いけどね」

「ハズレたか」

「ええ、おあいにくさま」

鶯は可愛げなく言うと、それじゃあ失礼するわね、と生徒会室をあとにした。不真面目なおれと違い、鶯は教室に戻って自習を続ける気なのだ。

一人になったおれは再び青空を仰ぐ。

今の推理が的外れだとするなら、あと考えられるのは……

「あいつ、意外とナイーブなのか？」

おれは誰ともなくつぶやく。

植物図鑑によると、ヒメジヨオンと違い、ハルジオンは蕾が下を向いてうな垂れる性質がある。

すなわち、その意味するところは、

「悔悟、か」

夜になって自分のしでかした行為を改めて考え、身もだえして後悔する鶯の姿が思い浮かび、おれは思わず頬をゆるめた。

四月の風に乗ってカーテンがふらふらと揺れ、どこからともなく一匹の蟻が迷い込んでくる。蟻はおれめがけて突進してきた。

「なんだおまえ」

知性のある蟻の生き残りだろうか？ 仮にそうだとしても、彼一匹ではその知性を発揮する術はない。おれめがけて特攻したところで、指先で潰されておしまいだ。蟻一匹の力など、所詮そんなものだ。

「帰んな。ここは人間さまの土地だ」

おれはその蟻を掌にのせると、窓の外へとそっと逃した。

巨人殺しに失敗した蟻は、じぐざぐに壁を走って敗走し、やがておれの視界から姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0490x/>

限界生徒会のその日摘み

2011年11月10日19時06分発行